

〈とうとがなし〉精神で世界を繋げる人

田上悦子第四詩集『女性力』ウナクダキチウに寄せて

1

田上悦子さんが二〇〇五年に刊行した第三詩集『はなれ里の四季』の中で、私が最も好きな詩は「月見おはぎ屋開店事情」だ。この詩を読むと私たちの忙しい時間感覚が反自然的な時間であることに気づかせてくれ、本来的な宇宙の時間を身近なところから取り戻させてくれる。この詩が田上さんの現在の生き方のリズムを伝えているので、引用してみる。

“月見おはぎはいかがですか”

半月の夜 急いで広告文を書きました

月の良いときに営業するのです

例えば 十三夜とか満月の日に

思いつきの私の店は

街からだいぶ離れた所にあります

丘の上の 森と畑の拡がりの中

寄り添うように建ち並ぶ ひとかたまりの住宅の一つ

十八年前引越して来たとき

「この辺りは 調布のチベットと 言われています」と
近所の人が言っていました

その名の通り ふだんは誰も人が通りません
起伏の多い市内では標高が最も高いようで

雪が多少積ると 車は直ぐに立往生

空っ風が吹くと 家の中に畑の土が積ります

そば屋の出前も配達区域外

人が居るのか居ないのか

近所の家はひっそり静もつていて

独り居の夕暮れには 人恋しさが募り

涙が滲むときもあるのです

それでも集落の外れには

樹齢数百年の樺の大樹がそびえ立つ 鎮守の杜が

あり

畑も住人たちも

神さまに見守られているような気がします

少し離れて点在する農家の方たちは親切で

行き逢えば気安いおしゃべりを交し

花や野菜を分けてくれたりします

月夜の晩は 東の森から西の森まで

遮るものもない夜空を渡る

月のことばが聴こえます

空を見上げる私のことばも

お月さまは聴いてくれるのです

〔月見おはぎ屋開店事情〕の前半部〕

今年の初秋に田上悦子さんに誘われて、大掛史子さんや安永圭子さんら親しい詩人と出かけて多摩川土手で月見をした。同じ調布市在住で月の文化史やアイヌ・縄文文化などを大学で教えている古川ひろしさんが田上さんらに支援されて企画したものだ。多摩川の土手には子供から大人が多数あつまり、曇っていた夕空は晴れてきて十三夜の金色の月が昇ってきた。手作りのおはぎや飲み物が販売されていて、古川さんの月の話を拝聴し、土手下のススキと多摩川の下流から昇っていく月を見ながら、この世の憂さを忘れて月の世界に思いをはせる集まりだった。土手下では地元のと太鼓や沖繩の踊りのサークルの演技が繰り広げられたり、和胡弓の合奏の調べも夜空に響き渡った。何もかもが手作りで、私も普段着で集まった地元の人びとにとけこんで土手の階段にすわり、田上さん

で田上さんは近所の人たちや親しい友人を招いて月見をしていることは知っていたが、その月の力を借りた小さな一歩がこのような地域住民を自然に参加させる「つきまちの会」に発展していったことに驚かされた。そしてご主人を亡くされ

た後も地域の多くの人を結びつけたり励ましたりして豊かな文化の土壌作りをしていることが分かった。そんな田上さんの生き方はとても自然で清静しかった。

2

田上さんの第一詩集『光る骨』は、一九九〇年七月二十六日に発行された。あとがきによると、刊行日はご主人の七回忌の命日であり、多くはご主人の死後に書き溜めたものをまとめた、ご主人への鎮魂歌といえる詩集だった。その中で次の詩「ラブ・レター」が痛切だった。

ラブ・レター

彼に一度だけ ラブレターを送ったことがあった

誤字があつたら恥と思つて

辞書を引いて確認しながら書いた

思いの丈を書いたが それ以上に

文字を調べ 丁寧に書けて満足した

少し緊張してポストに入れた

彼から電話が来た

間違っている字なかつたかと訊くと

一つだけあつたという

真違いという字が間違っていたそらだ
間違いというのは 正しい事柄の間に
一寸違った事をしてしまったから間と書く
真が違うという事はある得ない と
私が感心したり恥ずかしがったりすると
間違いは取り返しのつく事だから それでいい
と言ってなぐさめてくれた

その彼は
「間違いだらけの人生」と言われる
この世を 生きられなくて
真実だけの世界へ逝ってしまった
取り返しのつかない世界へ――

抽斗の奥に 私宛に一通の封書があった
ふるえながら便箋に目を走らせると
それは
一字として誤字のない 思いあふれる
最初で最後のラブレターだった

手紙の終りの余白には
命日になってしまった日付が記されてある

大島に行ったことが、この詩集を生み出すきっかけになった
という。詩集題にもなった詩「とうとがなし立神」は不思議
な力を秘めて立ち上がってくる。

とうとがなし立神
切り通しのカーブを急に曲がって
案内人が「西古見ですよ」と 言ったとき
木の間隠れに 海に浮かぶ
立神タチガミと呼ばれる奇岩が三体
忽然と姿を現わした
太古の世界が 急に甦った気がした

車を下り ガードレールから身を乗り出して
辿り着いた母の故里を眺める
立神をおし頂いた 人のいうキユラシマ〈美ら里〉
いずれ無くなってしまおうと
心配されている 島はずれの過疎の村は
三方山深く埋もれ
低くなった太陽の光を受けて
残り火のような明るさ――

紫雲の色に輝く三体の岩は

田上さんのご主人は、五十一歳で自ら命を絶った。詩集を
読む限り誠実で完璧主義者のような生き方をされたように思
われる。例えば三島由紀夫のように自分の生きる時間と死に
場所をいつも考えていて、それを果たしてしまった。妻の田
上さんは、そんなご主人の存在や生き方を七回忌を迎えても
愛し続けている。悲しい結末を超えて、嬉しかった出逢いを
回想し、その中でご主人の生きた尊厳をひとつひとつ確認し
ている。愛するものの喪失感を直視し、その死者と共生する
ことよって、田上さんは一人の詩人になっていったのだと
思われる。遺書がラブレターであるというのは、まさしく真
実の愛がそこに表現されてあったに違いない。自分を殺して
も田上さんを守ろうとした何かがあったのだろう。田上さん
とは生涯を連れ添えないが、それを超えた人間の強さと弱さ
を兼ね備えた真実の姿があったのだろう。第二詩集とは、そ
の意味で亡くなったご主人との無言の対話を成り立っている、
七年近くをかけて二人で編んだ詩集だったのだ。

3

第二詩集『とうとがなし立神』の詩篇の大半は、父母の出
身地奄美大島の方言を生かしたものだ。田上さんは奄美生ま
れではないが、生家には奄美の「島言葉や三線の音色や島の
食べ物」がいつも溢れ、親類知人たちも四六時中集まってい
たという。そんな子供時代からの体験が甦ってきて奄美

やがて村が消えてしまっても
そこに在りつづけるだろう
そこに在るから立神なのだ
神のことを思いながら キュラシマを眺めていると
澄み透った淋しさが胸の裡をよぎっていた
神の手の中で生まれ育った母が
とても尊く思えてきた

ガードレールに掴まって うずくまる
閉じた目の中で
岩はどっしり巨きく海に聳え立った
目を開けると
岩はぐらりと揺らぎ
集落に向かっただんぜん迫って行った
私は とうとがなし と呟いた
母が何かにつけて口にする
奄美方言の祈りのことば トウトウガナシ
今初めて 自分の口から迸ったとうとがなし

田上さんは、自らの血に流れる自己を超えた何かを探しに
父母の故郷に帰っていった。そこで見たものは「紫雲の色に
輝く三体の岩」である「立神タチガミ」だった。母がいつも祈りの言
葉として語っていた「トウトウガナシ」が想起され、自分も

〈とうとがなし〉と思わず眩く場面は、自己のルーツを発見した感動が読むものにも伝わってくる。田上さんにはそんな大いなる神々に生かされていた父母や祖先を知って、身体の奥から疼いてくる何か不思議な重層的な感情が立ち現れてくる。母から口伝えされた〈とうとがなし〉は、(尊々がなし)や(尊々加那志)などと(尊く愛しい)存在に心を込めた言葉だという。無尽蔵の愛に包まれた奄美の精神世界が目前に立ち上がってきた。田上さんが人を眺める時には、きつと奄美の愛すべき人や神々を思い浮かべているのだ。人に対する尊敬と愛情が込められた〈とうとがなし〉は、現代人が忘れていた人を生かす言葉だ。

私の敬愛する詩人鳴海英吉は二〇〇〇年八月に亡くなったが、前年の一九九九年三月に田上さんの家で開かれた「奄美島唄のホームコンサート」に呼ばれた。鳴海さんも代表詩集『ナホト力集結地にて』一〇五篇の冒頭の「虹」と最後の詩篇「さよなら」二篇を朗読した。その貴重な朗読風景のビデオも田上さんは残している。二〇〇四年の第一回鳴海英吉研究会に田上さんは出席されてその時の映像を流してくれた。シンポジウムでもその時に鳴海さんは島唄者にとっても関心を持って質問したり、演劇青年に戦後の演劇人のことを懐かしそうに話していたと田上さんは語ってくれた。田上さんの家ではそんな詩人・音楽家・俳優・画家などの芸術家たちが自然に集まり交流を深めていく。きつと多くの芸術家たちに詩神を

感じさせるものがあるのだ。その詩神の奥には奄美の「尊々がなし立神」が住まっているのだ。

4

新詩集『ウツグデキヤラ 女性力』は、I章「残心一葉」が十七篇、II章「女性力」十六篇の計三十三篇が収められている。I章「残心一葉」の詩篇は、ご主人はもちろんだが、初恋の人、尊敬する掛け替えのない知人友人たちとの生涯を通じた深い対話が継続され記されている。田上さんの内面の葛藤も詩篇から読み取れる。「残心一葉」の後半の詩行は、澄んだ悲しみと生きる喜びとが言葉に転化されていつて胸にしみる。

静かな余生は 夢のまた夢

それでいい

“それでもなお

死ゆえの生があるように

迷いゆえの悟りがあるように

絶望こそが希望につながる”

と 解かれて 今さらに

冬を間近の 朝がかなしい

静かな屋根に

散ることが出来ない ことのはの影一つ

幽かに揺れている

(「残心一葉」の後半部)

これらの詩行は田上さんの人生哲学であり、強靱な詩的精神でもある。「死ゆえの生がある」や「絶望こそが希望につながる」などの逆説的な思索が田上さんをよりいっそう自由にしているように感じられる。「散ることが出来ない ことのはの影一つ」という詩行も切実で味わい深い。

最後にII章「ウツグデキヤラ 女性力」の題名詩には、男女同権で逆に現代の社会で見えにくくなっている「女性力」に焦点を当てている。今の行き詰った物質文明に突きつけるしなやかな力を感じさせてくれる。そこには〈尊々がなし〉の精神で「日本人の原像」を探求し続けている田上さんの「呼び起こさねばならないものが あるのではないか」という根源的な問いがある。また「世界につながっていたい」というしなやかな実践力がある。田上さんの「女性力」とは、天上や地上の愛するものとの永遠の対話をしながら、海上の神々への汲みつくせぬ思いを語り続けている。そんな「女性力」に立脚した詩篇を多くの方に読んでもらいたいと願っている。最後に「女性力」を引用して小論を終えたい。

へえけ あがるばればしや(ああ 天なる群星は)

えけ 神ぎやさしくせ (ああ 神の花櫛)
えけ あがるのちくもや (ああ 天なる横雲は)
えけ 神ぎやまなききゆび (ああ 神の御帯)

琉球人に “日本人の原像”あり という

その血を享けて現代に生きる私たち女性

呼び起こさねばならないものが あるのではないか

現代の “霊力” 民衆の失った信念だろうか

私という小さな一人の人間の 身裡から迸るもの

そのことを携えて私は 世界に繋がっていたいのだ

(「女性力」の後半部)